

～全体総括～

学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造

～3年次研究 子供が学びをつなぐ学習づくり～

研究推進委員

全体総括

I はじめに

近年、情報化やグローバル化，人工知能の発達等をはじめとした社会の大きな変化を背景に，資質・能力の育成の重要性が論じられている。来る未来を見据えたとき，子供たちにどのような力が必要なのかを吟味し，学校，家庭，社会等が連携しながら，それぞれの役割を果たしていくことが求められている。

平成29年3月に公示された次期学習指導要領では，教育課程の重要性とその位置付けを明確にした上で，これからの時代が求める資質・能力を，学校教育を通していかに育成していくかという視点が示された。また，そこでは「主体的・対話的で深い学び」というキーワードと共に授業改善の具体にも触れている。

翻って本校では，総括目標である「主体的人間の形成」の達成を目指して，全教科・領域による教育課程研究を長年にわたって積み重ねてきた。近年では，平成22～25年の研究において，見通しと振り返りの充実による意欲付け，学びの意味や価値の自覚化，平成25～28年の研究においては，主体的な学びと学び合いに着目した協働的・双方向的な問題解決の在り方に取り組んでおり，これは次期学習指導要領の要点とも合致していると考えられる。これらの研究の成果については，改善が加えられながら今に引き継がれている。

さて，本研究を進めるに当たり，これまでの研究，とりわけ前研究の成果と課題，児童の実態等を分析した結果，以下の3点が課題として挙げられた。

- 課題や問題の解決を見通したり，学びを通しての自己の変容を積極的に捉えたりすること。
- 場面や状況，目的に応じて，課題や問題の解決に必要なことを選んだり考え出したりすること。
- 他の思いや考え，様々な感じ方のよさを認め，進んで関わりを求めること。

これまでの研究においても，これらの力に着目した授業の在り方について模索してきており，成果も報告されている。しかし，いまだ必要な力として挙げられる背景には，一つ一つの学習がその時々では効果的であっても，総合的，継続的な力の育成に向けて十分に機能していなかった部分があったのではないかと考えた。

その理由として，①これらの力の習得を実現する各教科等の学習が単発的なものになっており，総合的，継続的な育成が十分ではなかったこと②それゆえ，身に付いた力の価値を児童が十分に認識できず，児童が他の場面で活用できなかったこと，などが考えられる。本校においてどのような力を付けたいのかを今一度明確にし，それらを各教科等がどのように担い，どのような学習として具現化していくのかを明らかにすることが必要であると言える。

そこで、前研究の成果である「児童の主体的・協働的な学び」を基盤とした上で、「本校で育てたい資質・能力」と「それらを実現する学習の在り方」に焦点を当てて、研究を進めた。本研究により、児童の資質・能力を育む単元や題材の構成はどのようなものかを明らかにし、教育課程の改善につなげていくことを目指した。

Ⅱ 研究の目的と方法

本研究の最終的な目的は、先述の課題を克服して能動的に学び続ける子供、すなわち「学びをつなぐ子供」の育成を目指すことにある。

【学びをつなぐ子供】

学ぶ目的や学び方を明確にし、他者との学びを通して自己の考えを広げたり、見方・考え方を働かせて自己の考えを形成したりする中で、資質・能力を身に付け、能動的に学び続ける子供。

ここでいう資質・能力とは、本校の教育目標と「生きる力」との関わりや、児童の課題等を踏まえて設定した、「本校で育てたい6つの資質・能力」である。様々な資質・能力の中から、本校の児童に必要なだと考えるものをまとめたものである。

<本研究で重視する資質・能力>

| 本校で育てたい6つの資質・能力 | 具体の姿 |
|-----------------|-----------------------------------|
| A 解決策を構想する力 | 課題や問題を見付け、それらを解決するための見通しをもつ児童。 |
| B 情報を活用する力 | 課題や問題の解決に必要な情報を、取捨選択する児童。 |
| C 論理的に考える力 | 自分の考えの根拠を示しながら、筋道立てて説明する児童。 |
| D 創造的に考える力 | 物事を捉え直したり、新たなものの見方や考え方をしたりする児童。 |
| E 他と関わり合う力 | 他者と関わり、互いの考えや価値観を認めようとする児童。 |
| F 自らを振り返る力 | 自分の学びの様子や変容を捉え、客観的に考えたり評価したりする児童。 |

1年次研究では「各教科等において重視する資質・能力の育成を目指す学習づくり」、2年次研究では「深い学びを実現する学習づくり」をテーマに研究を進めた。3年次研究では、「子供が学びをつなぐ学習づくり」をテーマに研究を進め、本研究を総括した。子供が学びをつなぐ学習の在り方について、次の3点に沿って明らかにする。

- 視点1 子供が学びをつなぐ単元構成
- 視点2 子供が学びをつなぐ授業展開
- 視点3 子供が学びをつなぐ評価

Ⅲ 結果と考察

各教科・領域の実践を通して、子供が学びをつなぐために効果的であることが明らかになった手立ては、以下の通りである（詳細については、各教科・領域の実践を参照）。

| | 効果的な手立て | 国 | 社 | 算 | 理 | 生 | 図 | 家 | 体 | 外 | 総 | 特 |
|-------------------|----------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 視点1 | 資質・能力と指導内容の系統を重視した単元及び題材構成 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ |
| | 教科横断的な単元構成 | | ○ | | ○ | | | | | | | |
| | 問題解決的な学習の過程を重視した単元構成 | | ○ | | | | | | | | ○ | |
| | 単元及び題材相互の関連を重視した構成の工夫 | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ |
| | 見方・考え方を明確にした単元構成 | | | | ○ | | | | ○ | | | |
| 視点2 | 既習や経験の想起を促す比較・検討場面の設定 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ |
| | 環境の工夫（ICT，掲示，教具等） | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ |
| | 板書の工夫 | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | |
| | 導入場面の工夫 | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 終末場面の工夫 | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | |
| | 交流場面の工夫 | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| | 学習をまとめ表現する活動の工夫 | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | |
| 児童の姿に応じた教師の関わりの系統 | | | | | | | | | | | | ○ |
| 視点3 | 児童の姿を具体的に想定した評価規準の設定 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | |
| | 教師の適切な関わり（声掛け，コメント等） | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | |
| | 学習段階に応じた評価方法の適切な位置付け | | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | |
| | 視点を明確にした自己評価 | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 他者評価，他者評価を取り入れた自己評価 | | | | | | ○ | | | | | |
| | 複数回振り返る工夫 | | ○ | | | | | | | | | ○ |

〈全体総括〉

IV まとめ

3年次研究の成果と課題について、次にまとめる。

| | 成 果 | 課 題 |
|--------------------------------|---|---|
| 【視点1】 子供が学び をつなぐ単 元構成 | 単元及び題材で身に付ける資質・能力と他教科・他領域との関わり，目指す児童の姿の具体を明確に想定して学習活動を構想したことにより，1単位時間の意義をより明確にするとともに，発展性，創造性を伴う学びを引き出すことができた。 | 資質・能力を具体化して目指すべき児童の姿を明確にできた一方で，個別の資質・能力がコンテンツ化しがちな部分もある。一つの単元及び題材にとどまらず，より大きなくりにおける育成すべき資質・能力の具体化と，それらを育成する学習デザインについての検討が必要である。 |
| 【視点2】 子供が学び をつなぐ授 業展開 | 複数の教科・領域において，学びの連続を強く意図した明示的な指導，環境の工夫等の手立てが，子供が学びをつなぐために効果的であることが分かった。さらには，学習段階に応じた指導の工夫や交流場面の設定も，つなぐ手立てとして効果的であったと言える。 | 他の学習や日常生活とつなぐ，他者をつなぐ等の手立ては有効であったが，本来の教科・領域の目標を達成することとのバランスを意識した学習づくりが肝要である。教科等の目標と学びをつなぐこととの関わりは，絶えず検討が必要である。 |
| 【視点3】 子供が学び をつなぐ評 価 | 教師が学びをつなぐ児童の姿を具体的に想定したことで，学びの過程や資質・能力を的確に見取るとともに，学習状況や学習段階に応じた，適切な指導につながった。また，視点を明確にした自己評価の継続は，これまでの学習を再確認することにつながった。 | いくつかの教科・領域で実践した，見通しや振り返りの場の設定を複数回設定したり，まとめを児童に委ねたりする手立てから，個人の学習状況により一層目を向ける必要性が浮かび上がってきた。一人一人の学びに焦点を当てた評価の検討が必要である。 |